

朱の花粉

3

舟橋聖一

朱の花粉



朱の花粉

舟橋聖一



講談社版

朱の花粉



昭和35年1月15日 第1刷発行

著者 舟橋聖一

¥320

発行者 東京都文京区音羽町 3-19
野間省一

印刷所 東京都文京区関口町 140
慶昌堂印刷株式会社

発行所 東京都文京区
音羽町 3-19

株式会社 講談社
振替 東京 (3930)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (黒柳製本)

© Seichi Funahashi. 1959

朱
の
花
粉
3

装
幀
三
岸
節
子

目次

骨肉の情	7
マクベス	20
逃 亡	33
悪 女	47
添 水 の 音	61
師 弟	75
水 た ま り	89
フアナチックな恋	103
キイ・ポイント	117
二つの手紙	130
かみなり雲	142
自 由 形	156

パ ス テ ル 画	金 剛 力	鶴 峠	深 夜 の 客	弱 者	櫛	青 い 半 月	毒 の 花	爪 ふ た つ	火 傷	独 占 欲	居 酒 屋
.....
320	307	293	279	265	251	238	225	211	197	184	170

骨肉の情

次の日も、また次の日も、菊繪はD警察との往復にあけくれた。井太郎せいたろうの叔父になる村部治作にも逢った。村部は東京から、用意周到に、その知人だという少壮弁護士結城慎造をつれてきた。

「私の家にさえ居れば、こんなことはなかったんです」

と、村部治作は、話の終りに、これをくり返した。井太郎は、空襲で孤児になってから、七ヵ月ばかり、この叔父さんの家に世話になっていたらしいが、どういう動機か、そこを飛出して、三十間堀の鮎屋あややの小僧になるまで、誰も知らない謎の数ヵ月がある。

「あなたのような美人と一緒に暮らしているとは、まったく夢にも知らなかった。もっと前にそれがわかっていたら、時々、遊びに伺うところだった」

と、村部は笑った。

「一緒だったって、何も……夫婦じゃないんですから」

「そりゃアまあそうじゃろうが」

「すし徳から一緒に暇をとったりなんぞしたもんですから、同居してたんです」

「いや、いや。よく面倒を見て下さった。ありがとう。御礼を申上げる」

「それで村部さんの御商売は」

「薬局ですよ。然し、自分は薬局の親父おやぢで一生を終ろうとは思っていません。来年の選挙には、立候補するつもりですよ、ハハハ」

「政党は？」

「むろん、社会党——そのときは、一つ、加島さんにも応援して戴きましよう」

「あら、あたしなんぞ、何ンのお役にも立ちませんわ」

「いや、そんなことはない。なア、結城さん……」

と、ふりかえる。村部が結城を先生と呼ばないのは、遠い親類関係もあるからで。——結城慎造は、弁護士としては、無口のほうだが、年もまだ四十前というから、将来の大成が望まれる。「こんどの事件は、案外、難かしいところがありますなア……井太郎君が、例の女性のことを、黙秘しているのです、これが見通しを妨げているのです」

結城はいつも、大きな鞆を手から離さない。

その鞆をぶらさげて、大股に横断歩道を歩く姿は、精力的な印象だ。椅子に掛けていても、揃えた膝の上にガッチリ置いて、減多に横へはおろさない。

「加島さん……何か思い当る女はありませんかえ」

と、村部が訊いた。

「それが、とんとわかりませんのよ……何しろ、井ちゃんは女ぎらいだったし」

「では、加島さんだけが、特別だったのかな……ハハハ」

「でも、あたしと別れてから、そういう人が出来たンでしようね……」

「昨日の主任の話では、自分は塩見という男を殺したのではない。塩見が自分に向かつて、例のスタンドの台尻を振り上げて、襲いかかったから、自分を防衛するべく、彼の脾腹を蹴った……ところが、塩見は機をくらって、ベッドの角へ顔をぶっつけて、倒れた、という風に自供しているそうですよ、村部さん」

「なるほどね」

「そうなると、正当防衛が成り立つんじゃないですか」

と、菊繪は声を慄わして云ったが、結城はその程度の自供では、まだ見込みが立つとは云えぬと慎重だった。

2

三人が話合っているところは、三条大橋附近の日本旅館の一室である。

「あたし、京都へ着いた日に、主任さんに逢ったときも、すぐ訊いたンですよ。井ちゃんは、その謎の婦人を愛していたンだろうかって。そうしたら、主任さんの話によると、彼は愛してなんかいなかった、と訊問に答えたそうですよ」

と、菊繪は結城のほうへ向いて語った。その部屋からは、鴨川をへだてて、向側に東山の起伏がよく眺められた。今日は夕立のあとなので、濡れた青葉の色が、ことに美しい夕景色だった。

「結城先生……ほんとに万全を期して、井ちゃんを救ってやって下さいね」

「そのつもりで、データを集めています」

「あたし、井ちゃんを信じているんです。あの子に限って、決してそんな不良ではないって……新聞で報道したような……あんな出鱈目でたらめは、絶対に……」

「いや全く、その通りだと思う。新聞はひどすぎる。結城さんもそう思うだろう」

「むろん、そうです。新聞記者はごく皮相を、興味的に書きますから……」

「でも先生。井ちゃんが彼を殺したか、それとも、彼が自分で倒れて、うちどころが悪くって死んだかは、重大問題ね……それが、どっちになるかで、全然、別のケースになりますわね」

「警察も新聞も、はじめから、堀井太郎せいでの殺人事件として扱っていますからね。この第一印象的なものを、ひつくり返すのは、なかなか面倒なんです」

「でも、それをやらないと、井ちゃんが助からないとすれば、どこまでも、そこを先生に押しつけておくほかはないわね」

「そうです。ところが、まだ全部材料が揃わない。それで警察では、心証を悪くしているようですよ」

と、結城が云った。そう云う彼にも、また村部や菊繪にも、そのことはわかっていないのであるから、事件は依然として、不透明な霧かきに包まれている。

「井ちゃんは、恩義にあつい子だから、その女性を愛してはいなかったにせよ、いろいろ恩恵を受けたことがあるンじゃアないかと思うの……どうでしょう、村部さん」

「そういうことも考えられるな……然し、若し、そんなことだったら、この際ズバリと自供せにゃアいかん。恩は恩、罪は罪じゃろが……警察では、まだ誰にも、逢わせていないのだね」

「何しろ、盛んに聞きこみや傍証を集めている最中だモンですから……井太郎が自供しないでも、女のほうで自首することもあるし、また第三者から、段々に、わかってきて、固まることもありますが——」

「加島さんに逢って貰って、とっくり話せば、井太郎はすぐ、その女の名前は云うンじゃアないかと思う。これが一番早道だよ、加島さん」

「僕も同感ですが、警察では、まだ逢わせたがらないようです。要するに逢わせることで、却って、事件がかき廻される。丁度、殺人の現場が、第三者の手で触られると、善意であれ、重要な証拠湮滅が行われるのと同じで、今少し、警察は警察だけで調べたい——とまア、そういうところらしいです」

「それで、甚だ申しにくいですが、私はどうしても、今夜、東京へ帰らなければならぬ用事がある。みなさんにやって貰っているのに、責任者の私が、逃げるようで、申訳がないが、また止むを得んのだ。もっとも、用事のすみ次第、また西下する肚ではあります。どうか一つ、よろしくお願ひしますよ」

と、村部はチャブ台に肘を張って、少し禿げ上っている頭を、下げた。

河原に宵闇が下りる頃、三人は食卓を囲んだ。村部治作は、年とってから酒に弱いらしく、すぐ顔を赫くした。菊繪が酌をすると、

「こりゃア思いがけないことで、あなたのような美人にお酌をして貰うなんて、冥利につきる。わざわざ京都まで、甥の事件でかけつけるときは、腐り切ったが、そのおかげで、有りがたいことです。一しお、今夜の酒がうまい」

「ホホホ。そんなに仰有られると、何ンにも云えなくなるけれど、村部さん……もうその、美人、美人はよして頂戴な……ちっとも美人でもないのに……いやだわ」

「いや、美人に違いないさ、ねえ、結城さん」
と、応援を求めるが、この無駄口のきらいらしい少壮弁護士は、ただ、ニヤリと口もとをほころばせるだけである。

やがて食事が終わると、ほろ酔いの村部は、酔ざましに、四条あたりまで、散歩しようと云ったが、結城慎造は調べものをしたいからと辞退した。それをよいことに、村部は菊繪をさそって、街へ出た。

、当時は焼けなかった京都に、日本中の一番いいものが残っているような気がして、人氣が集っていた。焼けた大阪人が、京都へ殺到して、資本をおろすのに夢中だったのも、その頃である。「こうして歩いていると、まさか夫婦とも思われぬが、可愛い若い二号さんと、京都へ遊び

に來ている位には見えるでしょう」

と、村部は云った。二人は、肩を並べて、河原町の明るいペーブルメントを歩いた。

「あなたのお父さんは、齒医者さんをしていらっしやるそうですね」

「まあ、よくご存知！」

「いや、さっき結城弁護士から聞いたんですよ。そういう彼は、恐らく警察の主任からでも聞いたんじゃないんですか……」

「加島則光って云うんです」

「お名前は知っています。そうですか。加島先生のお嬢さんですか。では尚更なおさら、光榮の至りだ」

「わけがあって、家を出ていますの」

「そりゃアうまくない。やっぱり、お嬢さんは、パパやママのそばにいらっしやるのが、本命ですよ。こんどの事件を契機に、家庭へお戻りなさい。村部薬局は、決して悪いことは申しませ
ん」

「御忠告はありがとうございます。でも、そう簡単にもいきませんの。それに、こんどの事件と、あたしの家庭問題とは、関係がありませんものね」

「御主人はいらっしやるらないんですか……或いは失礼な質問になるかも知れないが」

「居りません」

「それで安心した。実は、この間から、あなたの顔を見るたんびに、それが気になってね、……
男なんて、バカなものですよ」

「女もバカよ……あたしは又、結城先生の顔を見るたびに、あの方の奥さんで、どんな方かしらって思うんですよ」

「ところが、結城さんのほうでも、あなたのことを、気にしているから面白い」

「何ンて？」

「やっぱり、あなたの配偶者のことさ……誰でも聞きたいのは同じと見える」

「そうね」

「結城さんは、空襲で奥さんも子供も死んだ。復員した当時は、ほんとに、ボンヤリしてました。三人いた子供が、三人とも死んだんだから……」

「お気の毒に」

「喫茶店がある。ノドがかわいたから、何か呑もう」

村部治作は、先きに立って、ドアをあけ、菊繪を招いて、自分はあとから、菊繪の肩を押すようにして、はいった。

4

喫茶店ではバンドが鳴っていた。村部は冷いものを注文してから、

「やっと、酔がさめた。何しろ、近頃はめっきり弱くなりましたよ。これで昔は、平気で一升平げたこともある」

「結城先生は、あんまり召し上らないようですね」